

氏名	徳永 なみじ
授与した学位	博士
専攻分野の名称	保健学
学位授与番号	博甲第5422号
学位授与の日付	平成28年 9月30日
学位授与の要件	保健学研究科 保健学専攻 (学位規則第4条第1項該当)
学位論文の題目	Psychosomatic effects of blanketing in nursing care (看護行為中のブランケット保護がもたらす心身への影響)
論文審査委員	齋藤信也 教授、 白井喜代子 教授、 兵藤好美 准教授

学位論文内容の要旨

本研究の目的は、看護行為中のブランケット保護が、ひとの心身にどのような影響を及ぼすかを明らかにすることである。看護師は、全身清拭や寝衣交換などの看護行為中に患者の身体を覆いながらケアを行う。この「ブランケットで身体を覆う」行為（以下、ブランケット保護）は、保温やプライバシー保護を目的としており、さまざまな看護技術に共通して行われる基本的援助行為である。健康な青年期女性 28 名を対象とし、被験者内比較クロスオーバーデザインを用いた。即ち、ブランケット保護がある場合とない場合の 2 系統の介入実験を 1 被験者につき 2 回ずつ異なる日に実施した。心理的緊張をもたらす介入は、白衣を着用した初対面の者（看護師免許あり）が被験者のバイタルサイン測定と唾液採取を 5 分間で行った。実験中の被験者の反応を心理的・身体的側面から観察、測定した。POMS の T 得点の比較では、「緊張-不安」の得点がブランケット保護ありにおいてのみ介入後に有意に低下した ($P < 0.05$)。介入に対する主観的評価 (VAS) では、「安心感がある」「守られている」の 2 項目で、ブランケット保護ありの方が有意に高かった ($P < 0.05$)。心拍変動を用いた自律神経活性では、ブランケット保護ありがなしよりも有意に副交感神経活性が高く、交感神経活性が低かった ($P < 0.05$)。

以上の結果から、看護行為中のブランケット保護は、患者の心理的緊張を緩和し安心感を与えることが明らかになった。

論文審査結果の要旨

論文審査要旨：

本論文は、看護行為中のブランケット保護が患者の心身にどのような影響を及ぼすかを明らかにする目的で行われたクロスオーバーデザインによる比較研究である。ブランケット保護によって、POMSのT得点中、「緊張・不安」項目だけが、介入後に有意に低下したことから、VASで「安心感がある」「守られている」の2項目で、ブランケット保護ありの方が優位に高い結果を得た。またブランケット保護で、副交感神経活性亢進と交感神経活性低下が見られたことから、看護行為中のブランケット保護は、患者の心理的緊張を緩和し、安心感を与えると結論づけている。

研究の本来の目的は、清拭のような看護行為中に、患者のブラバシー保護のため、本来の行為が少々やりにくくても、ブランケットでそれを隠すことの意義を証明したかったはずであるが、実験デザインでは、ブランケット保護は、単に首から足先まで全てを大きなブランケットで覆うだけという介入に単純化されており、これをブランケットが全く掛かっていないものと比較すれば、安心や緊張緩和が見られるのは、ある意味当たり前と思われる。ブランケット保護の効果というより、上掛けの効果評価に置き換わっている可能性が否定できない。よって、結果の看護臨床へのimplicationには、一定の限界があると考えられる。

一方、しっかりした研究デザインに基づいた緻密な研究であり、看護臨床に一定のエビデンスを提供したことは高く評価でき、博士の学位に値すると判断された。